

113 學年度第一學期 Eurasia 基金會 (from Asia) 國際講座
第七期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次 (15)

講題：アジアにおける漢字語彙の習得

陳毓敏

(2024. 12. 26)

要旨

今回の講演は、アジアにおける漢字語彙の習得に焦点を当て、とりわけ台湾人学習者がどのように日本語の漢字を学ぶかをメインとして進められる。第二言語習得の観点から、アジアにおける漢字語彙の意味習得の状況を紹介する。講演内容は、以下の4つの部分に分けている：なぜ漢字を研究するのか、漢字の対照研究、漢字語彙の習得研究、そして漢字語彙に関するゲーム。この講演を通じて、参加者の皆さんに漢字語彙習得研究の奥深さと楽しさを体験していただく。

一、なぜ漢字を研究するのか

まず、講演者は、中国文化大学日本語学科卒業後、高等職業学校で教職に就いた際、現場でより高度な日本語能力が必要だと感じ、日本留学を決意されたという。留学中に日本の街頭で見かけた漢字の看板から、日中漢字の意味の違いについて着想を得て研究の出発点となったという。

なぜ漢字語彙の研究を選んだのか。それは、先行研究によると、日本語では新聞、雑誌、日本語辞典の見出しなどにおいて、漢字の占める割合が45%以上にも達し、読み方が面白いのみならず、中国語の漢字と意味が異なるものも非常に多いからだという。研究テーマを考案する中で、漢字語彙研究は「形（形態）、音（音韻）、義（意味）」という三つの大きなタイプに分類されることが分かったという。

形 日中漢字の字形（形態）対照、例：學學 當當 歩歩 屬屬など。

音 日本語の発音が多様になる部分、例：男女（なんによ、だんじょ）
利益（りやく、りえき）。

義 日中同形漢字の意味対照、例：大丈夫 迷惑 用心。

講演者は最終的には漢字語彙の「義（意味）」を研究することにされたという。

二、漢字の対照研究

漢字の日中対照研究について主に以下の四つのタイプに分けられる。

1. 構造研究

日本語は主に後続名詞の連体形態、特に名詞＋名詞（例：牛乳）の形式が

最も多いようである。これに対して中国語は形容詞＋名詞(如：短線)の方が
多いようである。

2. 反転現象の研究

日中漢字の語彙には反転の現象があるようである。

如：搬運／運搬 和平／平和 階段／段階
 痛苦／苦痛 設施／施設 威脅／脅威

両方ある部分もある。例：日本語では「階段／段階」両方あり、中国語では「痛苦／苦痛」両方ある。

3. 品詞の研究

中国語と日本語の品詞分類は、先行研究によってその数が異なり、日中同形語の品詞も必ずしも一致するわけではない。例えば、中国語の「發展」は自動詞と他動詞の両方の用法があるが、日本語の「發展」は動詞として使われる場合、自動詞のみである。また、中国語の「緊張」は形容詞であるが、日本語の「緊張」は自動詞である。さらに、中国語の「根據」は動詞であるのに対し、日本語の「根拠」は名詞なのである。

4. 分類研究

日本の文化庁は 1978 年に『中国語と対応する漢語』調査を公表し、日本語と中国語の辞書 2000 字を対照した結果、それぞれ「同義語 (S=Same)」は 66.67%、「類義語 (O=Overlapping)」と「異義語 (D=Different)」は各 25%、「欠落語 (N=Nothing)」は 25% 占めているという。

また、先行研究では、日中漢字語彙の意味が異なる原因についても触れられている。例えば、中国語の「敷衍」は「自分の言動に責任を持たない」や「いい加減に対応する」という意味であるが、日本語の「敷衍」は「広める、展開する」という意味になる。これは時代や社会生活の変化によるものだという。

語の意味変化の傾向には以下のようなものがある：(1) 意味の具体化や抽象化 (例：脱帽)。(2) 価値の違い～肯定的、中立的、否定的 (例：物色)。(3) 本義と転義の相違 (例：愛情)。(4) 完全相違 (如：勉強)。さらに日本から「借用」した和製漢語 (例：民主、哲学。手続など) もあるという。

三、漢字語彙の習得研究

この部分は本講座のポイントである。まずは漢字語彙の習得方法に関する研究である。次は日中語義分類に関する研究

1. 漢字語彙学習得の方法に関する研究

講演者は、横断面＝学習者の特定の時期の学習データを収集、および縦断面＝学習者の長期間の学習データを収集という 2 つの観点から調査を行ったという。台湾の大学生 295 名を対象にして、調査した結果、台湾人が語彙を学ぶ方法は大きく以下の 4 つに分類されることが分った：母語を利用して習

得、記憶法を活用する、辞書を使う、その他（番組を見る、漫画を読む、慣用表現を覚えるなど）。

講演者は研究を進める際、当時流行していた2つの理論、プロトタイプ理論と第二言語習得理論を応用して漢字習得研究を始め、最終的には第二言語習得理論を選択したという。この中で特に言及されたのが、第二言語習得理論における「転移」の概念である。これは母語干渉を受けて習得に転移が生じる現象で、詳細には以下のように分類される：

①「プラスの転移」、②「マイナスの転移」、③間違いを恐れてわざと日本語使用を避ける「回避」、④学習過程における「過程の転移」、⑤母語の習慣や文化が外国語学習に影響を与える「社会文化の転移」、⑥中国語の漢字知識を過剰に活用してしまう「過剰使用」、そして⑦個人の主観に起因する「心理的転移」。

2. 日中語義分類に関する研究

講演者は、日中語義の分類を細分類し、以下のタイプに分類した：

- ①同義語
- ②類義語 1 (=中国語の使用範囲が日本語より広い)
- ③類義語 2 (=日本語の使用範囲が中国語より広い)
- ④類義語 3 (=中国語と日本語の使用範囲が一部重なる)
- ⑤異義語
- ⑥欠落語

このうち、類義語 1、2、3 のどのタイプでもかなり高い類似性を持つものの、使用頻度には一貫性がないことが分かったという。

先行研究との差別化を図るため、講演者は欧米の第二言語習得における習得難易度の階層理論を応用し、従来の「分離、新規、欠落、融合、一致」などのタイプを基に、中日漢字の種類を新たに再分類した。

これに基づき、中日漢字を以下の6つのタイプに再分類した：

- ①同義語
- ②類義語 1 (=共通語義の使用頻度と意味が一致するもの)
- ③類義語 2 (=共通語義の使用頻度と意味が一致しないもの)
- ④異義語
- ⑤欠落語 1 (=漢字から語義を推測できるもの)
- ⑥欠落語 2 (=漢字から語義を推測できないもの)

さらに、各漢字語彙の習得難易度を予測し、「類義語 2、異義語、欠落語 2」の難易度が「同義語、類義語 1、欠落語 1」よりも高いことが示されたという。

上記の理論に基づいて講演者は台湾人日本語学習者を対象に、以下の2つの方法で実証調査を行った：

- 1. 母語翻訳判定法による語彙知識の確認

2. 文の正誤判定法による語彙運用の確認

結果として、初級の日本語学習者においては、2つのテストの傾向が一致し、予測された難易度階層が検証された。一方で、日本語能力が異なる学習者に対してさらにテストを行った結果、日本語能力試験旧制度1級レベルの学習者には難易度階層がなくなったものの、2級および3級の学習者は初級学習者と同じ難易度階層が確認されたという。

また、学習環境の違いについても実証調査が行われた。台湾で学ぶ学習者（JFL）と日本で学ぶ学習者（JSL）を対象とした結果、日本で学ぶ学習者は2級レベルでもすでに難易度階層が見られなくなっていることが分った。これらの横断面研究から、日本語能力の高低が日中語彙判断の誤差に影響を及ぼし、さらに学習環境の違いも影響することが確認されたという。

縦断面研究の実証部分について、台湾人初級学習者の作文内容を分析した結果、漢字語彙の種類に「Chinese」というタイプが増加しており、初級学習者には中国語を日本語として書いてしまう傾向が見られた。また、中級および上級学習者の作文を分析したところ、以下の結果が分かった：

1. 漢字語彙の誤りは、日本語能力や学年が上がってもなくなる。
2. すべての種類の漢字語彙に誤用が生じている。
3. 「Chinese」の誤用が最も多く、上級学習者でも消えない。
4. 同義語誤用の原因は、日中品詞の違いや日本語では別の語彙が使用されることにある。
5. 誤用と正用が同時に存在する。

四、漢字語彙に関するゲーム

講座の最後に講演者は学生が楽しく便利に学べる2つの漢字語彙ゲームを紹介し、参加者に実際に体験してもらった。

中国語要旨・まとめ 鍾季儒

日本語訳 陳順益

2024. 12. 28